

吠聲似雷耳。とある天狗をアマツキツネと讀めり。和訓栞に、天狗其疾如風。其聲如雷。震動可畏。など諸書に見えたり。かゝる妖怪によりて狐とは訓するなるべし。東鑑に天狗靈託の事、源氏にてんぐこだまなどいへるは、魑魅の類にて、或は老鷲の化する者といへり。我邦ことに古來怪説多し。これもまた星の名より出でたるなるべし。訓によりて天狐とも物に書きたり。また狐に天狐・地狐・人狐の別ありて、今いふ天狐はもとより天狐ともいひ、四官類函に、狐千歳與天通爲天狐と見ゆ。台記には、天公とも見えたり。鳥獸ともに天狗の名あり。鳥はかはせみ、獸はまみ也。杜子美が天狗賦に、上揚雲旂兮下列猛獸といへるは、三秦記にいふ有天狗來下。有賊則天狗吠而護之。と云ふ者なるべし。又五朝小説に載せし飛天夜叉といふ物、塔上より降りて婦人を捉つ。形象鴞に似たりと。又廣西通志に、一人約するに長二丈、面濶三尺餘、長さは倍す。披髮鳥喙、背に二翼ありといふ者、俗にいふ所に能く合へり。其の人夷語を能くすといへるは、此の邦よりや渡りけん。元亨釋書に、仲等が童兒の事をいふに、潛入山誦經。

不食月餘。已而得羽服成神仙。と見れ、釋陽勝仙を得て後、吉野山にて息眞に遇ひて、我心中无血肉遍體生奇毛といひ、身生兩翼飛遊空中と見ゆ。楚辭の註に、或人得道身生羽毛といへり。とあり。今按するに、彼の篠井氏が若鷲なる者も、仲等・陽勝が如く、仙術を得て現身を隠したるにや。世に天狗の怪談多きに依りて、爰に其の考按を記載す。

○御前坂

此の坂は、茨木町より本多町石浦舊社地への往來なる坂路にて、昔は坂路より社前への直道なり。故に御前坂と稱し、御前坂をゴゼ坂と呼べり。舊傳に云ふ。むかしは此の坂路より石浦社まで直道なるがゆゑに、正面に神殿を見渡し、實に神前の坂なりしを以て御前坂と稱す。然るに中頃本多氏、往來の中央をば調馬場となし、屈曲して神社へゆく事となしたりと。按するに、河北郡宮坂村は、小濱神社の黒津船浦に鎮座ありし頃、神前の坂路なりし村落也。故にむかしは御宮坂と呼べり。天正十一年四月の豊太閤花押の制札には、加州石川郡おまへさかと載せられ、延寶四年の達書

には、御宮坂とありて、今も世人御宮坂ともいへり。されば御前坂も、石浦社の神前なる坂路ゆゑ也。然るを今或は盲女坂と書きて、種々の妄誕を附會する傳話などを世人膾炙すれど、取るに足らず。盲女をゴゼと呼べるも、もとは御前の義なり。婦人を御前と呼ぶ事は、上代よりの事にて、本朝文粹卷一菅原大相國慰少男女雜詩の註に、俗謂貴女爲御。蓋取夫人女御之義也。と見え、東鑑に、幕府官女號姫前、また梶原景秀號龍樹前などありて、義經の妾を靜御前と呼べり。徒然草にはあま御前ともあり。又古今著聞集に、宇治左府御童名太郎御前とぞ申しける。曾我物語二に、すけどの若君いでき給ひ、御名をばせん鶴御前とぞ付け給ひける。とありて、御前をば皆ゴゼと呼べり。然ればむかしは男女共に御前と呼び、今盲女をば御前といふも女的美稱なるべし。

○石浦舊社地

此の地は、廣坂通石浦神社の舊社也。此の地に初めて鎮座の年月は、舊記に所見なけれども、今社藏の慶長十一年八月石浦七村氏子連名訴狀に、慶長七年三月廿九日に石うら

村之内三わらの御みやうつしの時、御せんぐうとしてあんぜん坊石うら村へ御出候云々。と見えれば、慶長七年に社殿再建の時、此の地に初めて造營せしにや。往昔よりの舊社地は、石浦町の裏、長町三番町淺香・山井の元第地にて、今も舊社地と稱し、雜木生茂りて遺蹟依然たり。是慶長以前の舊社地也と云へり。さて此の本多町なる社地は、慶長の末本多安房守政重再任の時、下邸を此の地邊にて賜はりけるに依りて、神社は他所へ移轉すべきを、安房守政重其の儘爰に指置きたりといへり。改作所日記に載せたる寛文十一年四月石浦社別當長谷山慈光院の書附に、先年故安房殿下屋敷之内に打込御請取候。然共往昔より在來候堂之由に而其儘被爲置、寛永年中に再興仕候刻、安房殿御斷申上候へば、可爲如前々旨被仰、造營致し罷在。と記載し、同年五月邑長田井村喜兵衛の書付にも、先規は石浦村領之内に而有之處、石浦村領先年安房殿下屋敷に相渡り候刻、右之宮屋敷安房殿下屋敷之内に打込相渡り候に付、百姓共かまひ不申。とあり。故に舊藩中は石浦社の所付は、石浦村と書來れる流例なりとぞ。然るに明治廢藩置縣